

# シュガー\*ホリック 3

*K a n a & S a g a r a*

---

齊河 燈

*Tob Saikawa*



エタニティ文庫

## 目次

書き下ろし番外編 君と薔薇色の日々	335
大人の時間になったなら	277
シュガー＊ホリック3	5

シ  
ユ  
ガ  
ー  
＊  
ホ  
リ  
ツ  
ク  
3

梅雨明けがひたすら待ち遠しい七月最初の日曜日。空は抜けるように青く、南国の海を彷彿とさせるような透明感だった。

ベランダから天に向かってジャンプしたら、ざぶんと潜れそうなくらい。うーん、天があの色なのだからもうすでにここは海の底かもしれない。

想像するとますます清々しい。

(今日はお洗濯物があつという間に乾きそう！)

私は洗ったシーツを物干し竿に引っ掛けて、広げる。そして、パンっとシワを伸ばした。篠竹香奈、二十六歳——自分でもびっくり！ の結婚十年目。ごくごく普通の主婦、やっています。

「んん、気持ちいいーっ」

すっきり晴れるのは実に十日ぶりだ。

嬉しくて朝から三回も洗濯機を回してしまった。洗ったのはシーツの他にタオル類、

それと衣類に布団カバー、夏用のラグも。

朝のニュースでは五月晴れだと言っていたけれど、七月なのに五月なんて不思議だ。日差しも夏らしくなってきたし、日中は暑くなりそうだから、言うなれば八月晴れという感じなのに。

秋は一雨ごとに寒さが増すなんて言うけれど、夏は梅雨の晴れ間が一番暑い気がする。そこから徐々に、暑さが周りの空気に馴染んでくるといふか。

なににせよ、主婦の楽しみは、こんな晴れの日に凝縮されていると私は思う。

お布団は干せるし、水仕事も気持ちいいし、乾きもいいからお風呂場の掃除もはかどる。まだ涼しい朝に窓を全開にして掃除機をかけるのも、その後、すっきりした部屋の中でのんびりアイロンがけをするのも楽しい。

日々を大事にしている感じがして、穏やかな気持ちになれるから好き。

——シーツが乾くまで、繕いものでもしようかな。

「香奈ー、どこだー？」

旦那さま。私は洗濯物のカゴを抱え、階段を駆け下りる。

「はい、どうしたの？」

「ああ、まだベランダにいたのか」

廊下で出会った彼は、私の腕からカゴをひよいと取り上げ、リビングのほうを親指で示す。

「いや、茶を淹れたから、そろそろ休めと言おうと思ってる」

篠竹相良——私の夫はゆるくウェーブがかかった癖毛と、彫りの深い顔、細身ながら無駄なく筋肉のついた体が素敵な四十五歳。

平日はブラックスーツにブラックシャツ、ボルドーのベストを制服のように着ている彼だけれど、本日はVネックのカットソーにストリートパンツというラフな格好をしている。

カジュアルな格好なのに王子様っぽい——ううん、王様っぽい雰囲気が見事だ。

片足に体重をかけてゆるっと立つ姿も、なんだか色っぽくて見惚れてしまう。

そう、私達は二十六歳と四十五歳で十九年の差夫婦。

父の親友だった彼には物心ついた頃から恋心を抱いていたけれど、振られっぱなしだったから、プロポーズされたときには何の冗談だろうと思っただけ。

「え、相良さんがお茶、淹れてくれたの？」

「そんなに意外そうに言うなよ。たまには淹れてるだろ」

「うん、それはそうだけど」

やっぱり意外だ。そもそも休日にこんなふうには、一緒に休もうと言ってくれること自

体珍しい。デートに出掛けないときは、なんとなくお互い自分のことをしているのがいつもの過ごし方なのに。

嬉々としてリビングに向かえば、ソファの前の座卓にハーブティーが用意されていた。

この匂いはレモンバーベナ？ いや、レモングラスかな。

「わ、美味しそう！ お茶菓子まで……いつの間に調達してきたの？ 朝ご飯食べてから出かけた？」

「いや、昨夜買ったきたんだが鞆に入れておまえてな。おまえ、ここの焼き菓子、好きだろう」

「うん。大好き！」

クッキーにフィナンシェにマドレーヌ。それらの袋に記されているロゴマークは、私がお好んで食べる洋菓子店のもの。覚えててくれたんだ。

パタパタとソファに駆け寄り、隅っこに座る。すると、背もたれのほうから近付いてきた彼が私の顎を掬うように持ち上げた。

「——ン、っ」

唇をさらうのは、触れるか触れないかといった程度の軽いキスだ。この上なく甘い感触に、顎の付け根がきゆうっとする。

「朝からご苦労さん。いつもありがとうな、感謝してる」

笑顔とセットの労いは、私にとつてなによりのご褒美だった。

結婚十年と言つても、私達の関係はまだまだ新婚さんのレベルだ。新婚さんの定義は未だによくわからないけれど、多分そうだと私は思う。

なにしろ私達が本当の意味で夫婦になれたのは年明けの頃、つまりたった半年前のこと。

それまで籍を入れてから九年と十一ヶ月の間、私達の間キス以上のことは何もなかった。

相良さん曰く、いつか私を他の男にくれてやる日が来ると考えて、保護者の立場を貫いていたそうだ。

両親は私を放つたらかしにして結婚と離婚を繰り返すような人達だったから、より良い保護者を演じようとしてくれていたのだと思うけれど……寂しかった。

なのに私は彼に遠慮して、ワガママなんて言えなかった。

だから体の関係どころか意思の疎通もままならなくて、夫婦というより同居人、いいところ家族でしかなかったんだよね。

それでも私は、側にいられるだけで幸せだった。妻でいさせてもらえたら、それだけで良かった。

「……今ではもう考えられないな」

呟いた私の前に、相良さんはハーブティーを注いだカップを置いてくれる。はちみつポットと、ミルクもだ。

高貴な雰囲気の人に至れり尽くせりしてもらっていると、お姫様にでもなった気分になる。なんて贅沢なひとときだろう。

「うん？ 何か言ったか」

「なんでもない。お菓子、早速いただくね」

朝からバタバタしていたから、すっかりお腹がすいている。おやつは嬉しい限りだ。大好きなフィナンシェを右手に、マドレーヌを左手に取ったら、すかさず忠告されてしまった。

「昼飯が食えなくなるまで詰め込むなよ」

「……う」

相良さん、たまに保護者気分が抜けていない気もする。

その後、一杯目のハーブティーを飲み終えるまで、私の頬は弛みっぱなしだった。

この世に贅沢は山とあれど、大好きな旦那さんの隣でのんびりと、美味しいお菓子とお茶を堪能できる……平凡ながらこの多幸感は何物にもかえがたい。

このところずっと仕事で忙しくて、ふたりで過ごす時間なんて持てなかったからなおさら嬉しい。

「——で、先週のお料理教室なんだけど、財前さん、旦那さまの好きなメニューだからって嬉しそうにしててね」

「へえ、あの忙しいさなかに料理教室まで行ってるのか、ふたりは」

「うん、実は蝶子さんも一緒に通い始めたんだよ。細い斎藤さんに少しは肉をつけるんだって意気込んで」

「勉強熱心だな、女性陣は」

感心したように言う彼は、長い足をゆったり組んでアームレストに読みかけの本を載せている。

会社では決して見られないリラックスしきったポーズに、どきっとして二つ目のマドレーヌを取る手が止まった。

——Vネックが目に見えだと思っただ。

喉元あたりから鎖骨までのラインなんて、デッサンに使う石膏像みたいに綺麗で色っぽい。

会社の皆も言っているけれど、相良さんの体は四十五歳にしては立派すぎる。せいぜい三十代にしか見えない。鍛える必要ないんじゃないかな。

あの相良さんは日々、筋力トレーニングをかかささない。私は彼が経営する会社に入力しているため、仕事の合間に運動している様を毎日目撃している。

そんな彼は今、筋力ではなく頭を鍛えるみたいは何やら分厚い本を読んでいる。

「相良さんこそ、休みの日までビジネス書を読むなんて勉強熱心だと思っよ。個展の準備で毎日忙しいのに、本当、たゆまないよね」

個展——展示するのは、相良さんが仕事及び個人的に制作した芸術品の数々だ。芸術家集団を率いながら、アートディレクターとして活躍してきた彼の、半生の軌跡とも言える。

予定では、東京の美術館を皮切りに関西を經由し、ニューヨークへ巡回する。その個展が始まるのは来週からだ。

昨日までに準備をあらかた終え、明後日には設営を開始するスケジュールになっている。つまり今日は、来週からの戦いにそなえて体調を整える日なのだった。

「……ああ、悪い。一緒にいるときは広げないほうがいいな、本」

相良さんが申し訳なさそうにアームレストの上の本をパタリと閉じたから、焦ってしまっただ。

「ううん！ そういう意味じゃなくて」

遠回しにかまって欲しいと言ったわけでは。そうフォローしようとしたら、長い腕が

顔の前まで伸びてきた。

「俺が、『そういう意味』で言われたらなんだよ」

節張った無骨な指に、口元を拭われて肩が少し跳ねる。

「いつも言ってるだろ、可愛いワガママをもっと聞かせろって。無駄に歳イ食ったわけだし、そのくらいのア斐性と包容力なら持ち合わせているつもりだが？」

私の口元を拭った指を、ぺろりと舐める赤い舌。恥ずかしさと、色っぽさにやられて顔面が一気に熱くなる。

相良さんに大人の余裕を見せつけられるのは、キスをされるよりドキドキする。コドモな自分をオトナな彼がオンナ扱いしてくれる、それがどれだけ甘美なことなのか、わかってるのかな。

それとも、わかっててやってるの……？

どきどきして落ち着かない私に気付いているのかいないのか、彼は少しして、思いついたように立ち上がった。テレビの電源を入れ、すぐに戻ってくる。

ニュースでも観るのかと思いきや、タブレット端末を画面の脇から伸びているコードで繋ぎ始めて……仕事でもするのだろうか。あのタブレットを弄るのは大概仕事のためだから、きっとそうだ。

私、席を外したほうがいい？ マドレーヌを咀嚼しながら様子をうかがっていると、画面に表示されたのは洋画のタイトルだった。

「あ、これ、先週テレビで観ようと思ってたやつ……」

視聴予約しておいたのに、仕事で帰りが遅くなって結局観られなかったタイトルだ。どうしてそれが、今。

「だろ。あの日は忙しくてなかなか帰してやれなかったからな。見逃して悔しがってるんじゃないかと思って、ウェブでレンタルしておいたんだ」

相良さんはソファに戻り、自分のすぐ隣を左手でポンポンと叩く。

「おいで、香奈。もつと俺の近くに。ふたりきりであるときは離れるないつも言ってるだろう。ほら、始まるぞ」

急かされて慌てて席を詰めたら、腰に左腕がまわってきて抱き寄せられた。

筋肉質な胸は私を受け止めてなお、余裕がある。空間的にも、恐らく精神的にも。

相良さん、私、やっぱりこれ以上のワガママなんて言えないよ。だって、言うまでもなく叶えられているもの。

(……しあわせ)

結婚十年目、私は旦那さまに恋をしている。

二十年経っても、三十年経っても、きつと褪せない恋を。



「ごちそうさん。今日も美味かった。午後はどうする？」

映画を見終えたらすぐに準備を整え、ふたりでのんびりランチを食べた。メニューは焼きおにぎりとお吸い物、それから鮭の粕漬けに、大根と鶏肉の煮物と、簡単な浅漬けを少々。

我が家の食事は相良さんが好むので基本は和食だ。

「買い物にでも行くか。車なら出すぞ」

言いながら、彼は肉味噌のタッパに蓋をする。我が家で焼きおにぎりといえば、付け合わせは必ずコレ——彼の実家のお母さま直伝の肉味噌と相場が決まっている。

白飯をふんわり握って焼いたものに、好みで少しずつのせて食べるのだ。シンプルだけれど、この食べ方が抜群に美味しい。

「ううん、来週は泊まりがけて個展の設営だし、パーティーが終わるまで帰宅できないから食品類は買い足さないほうが無難かなって」

「そうか、そうだったな。となると香奈の手料理には今晚を境にしばらくありつけないのか」

「……そんなにしゅんとしなくても」

肩を落とす彼は可愛いけれど少々大袈裟だと思う。

「外食のほうが無断然、贅沢なものが食べられるよ？」

「贅沢？ 金銭と引き換えに簡単に得られるものが贅沢なら、人は消費するだけで満足ができるはずだ。大事なのは付加価値だろう」

深い洞察。職業柄だろうか。

「私が付加価値ってこと？」

「おまえが俺のために手間ひま掛けた、つてのが付加価値」

彼は言って、顎にほんの少し生やした短い鬚をぞろりと撫でる。照れているみたいだ。くすくす笑いながら食器を下げ始めたら、相良さんは照れ隠しなのか、顔の前に新聞を広げてしまった。

一回り以上年上で大人で、洪くて素敵なのに完璧すぎないところが、私はとても好き。(職場では近寄り難い人なんだけど……こう見えて)

下げた食器を洗浄機に入れると、彼はまだ新聞を読んでいる様子だったので、スイッチを押してから二階へ向かう。やらなければならぬことはまだたくさんあるのだ。

彼の部屋で、クローゼットから引っぱり出したのはシャツ三枚。加えて自分の部屋で裁縫道具を調達し、一階へ戻る。

緩くなっているボタンがあったから、つけなおしておかなければと思ったのだ。

食卓に道具を広げていると、彼は新聞の向こうからちよっと顔を出して言った。

「午後は縫い物か。何から何まで悪いな」  
 「いいえー。実は相良さんのシャツ、洗ってもなんとなく相良さんの匂いがして、弄るのすごく好きなんだよね」

「……加齢……か……」

「え!? いやっ、ちがうよ、結婚当初からずっとこうだし」

「悪いな、フオローまで……」

「フオローじゃないってば」

なにやら、気になるお年頃みたいです。

そんなこんなで、縫い物を終えるとあつという間に夕方になっていた。

慌ててペランダへ行き、洗濯物を入れて、畳んで、それぞれの収納場所へ仕舞ってまわる。ラグなんて洗ってしまったものだから、これがなかなかの重労働だった。

ラグ類はあとで相良さんに手伝わしてもらって敷きなおすとして、シーツはひとりで広げられるだろうから、今のうちにかけておこう。考えながら洗面所を通りかかって、思いつく。あ、そうそう、シャンプーも詰め替えようと思っていたんだっけ。どうしてこう、ぼつかり忘れるかな、私。

急がないと夕食の時間になってしまう。

パタパタと廊下を駆け抜け、ふとりビングを覗いてみれば、旦那さまは三人がけのソファで仰向けになり眠り込んでいるようだった。

本を顔の上に乗せたまま。

お約束のポーズだ。ちよつと微笑ましいけれど、笑えはしない。

疲れてるんだよね。このところ以前にも増して出張であちこち飛び回っていたし、個展へのプレッシャーもあったし、体力的にも精神的にもキツかったはず。

「……ありがと、相良さん」

こんなに疲れてるのに、お茶、淹れてくれたんだね。

そう考えると、何気なく飲み干した二杯がやけに貴重なものだったように思えて、ああ、これが付加価値かあ、と心底理解した。

確かに貴重で有難いものだ。お茶そのものよりも。

たまらなくなつて彼に歩み寄りキスしようとする、壁面にひと筋の鮮やかなオレンジ色をみつけた。レースのカーテンの隙間から漏れ、壁に細い一本線を描く夕日。

もう日暮れなんだな。

何もしてない気もするけれど、目一杯したような気もする黄昏時。

なんでもない平坦な日々だからこそ、崩れぬようしつかり積み重ねていけるのだと気付いたのは最近のこと。

「これからも、ずっと私の旦那さまでいてね」

相良さんがいるから私、こんなふうには穏やかな一日が過ごせるんだよ。

小さくささやいて、改めてもう一度唇を寄せ、そっと重ねる。眠っている人の唇って、力んでいないせいにかすこく柔らかくて気持ちいい。

すると突然右腕を引つ張られて「ひゃ」と悲鳴を上げたのも束の間、硬くなった体は大きな胸に受け止められ――

「当たり前のことを言うなよ」

低い声が聞こえたとき、私はソファに沈められた格好で彼を見上げていた。

「お、起きてたの？」

「正確に言えば『途中から起きてた』だな。熱烈なキスに起こされた、とも言う」

「ねつれ……そんなに激しくしたつもりは」

ないんだけど。軽く重ねただけだし。

というか、あの、気のせいじゃなければ私、組み伏せられているんですけど。

それに、手が。

「……さ、がらさん、何して……っ」

どうしてスカートの中をまさぐってるの？

「うん」

「うん、じゃな……っ、ちよ、なんで脱がせるの!？」

「邪魔だからに決まってるだろう」

さも当然、といったふうには、彼は私のデニムミニの中から下着だけを引き抜く。太ももを滑る布地の感触に震えると、続けてTシャツをペロりと、捲り上げられてしまった。

「明るいよここ、ソファだし」

「さっきからわかりきったことばかり言うんだな」

ブラのカップを下にずらされて、ぶるんと両胸が零れ出る。慌てて隠そうとした両手は頭上で素早く拘束され、万事休すでは私は青ざめた。

「ま、待って、暑い中を駆け回ってたから汗っばいの。せめてシャワーを」

「待てないから襲ってんだろ」

「どういう理屈だろう。呆氣にとられる私に意地悪そうな笑みを見せ、彼は私の右胸の頂をペロ、と舐める。

「ふ、あつ」

心の準備ができていなかったせいか、いつもよりずっと強い刺激に感じた。

「寝込みにはキスなんて、いつからそんな誘い方を覚えたんだ？」

「えっ……あ、っん」

抱き起こされ、背もたれに後頭部を押し付けられて唇を奪われる。それは昼間、同じ

場所を受けた優しいキスとはまるきり別物だった。

唇と歯列をいっぺんに割り、口のなかを満たすのは熱い舌だ。応じる間もなく左の胸の膨らみにあてがわれた手は、そこを神経質なほどそっと握る。

「ん、んふ……っう」

キスは強引なのに、掌は優しいなんて狡い。

胸の先端をそっと転がされるのは、キツく摘まれるよりずっと苦手だ。じわじわ壊されていくようで、いっそ一気に崩して欲しくてたまらなくなる。

「香奈……」

ビクビクと肩を震わせる私にキスを与え続けながら、相良さんは空いているほうの手で私の太ももを割る。そうして指先で捉えたのは付け根の少し深い部分だった。

「ふ、うアっ……だ、め」

濡れている、のが、自分でもはつきりわかる。やだ、私、もう……

粒を掠められ、びくんっ、と腰が跳ねたら、はずみで唇の右端からぬるいものが伝った。散々口腔内を刺激され、潤いきっていったのだ。

あ、零してしまっ——咄嗟に拭おうとした手を掴み、相良さんは舌先でそれを舐めとる。ゆっくりと、味を確かめるように。

「……どうしてここまでゾクゾクさせられちゃうんだろうな、おまえには」

ゾクゾクしているのはこちらのほうだ。もう、目がそらせない。

腰にまわってきた腕が、私を座面の縁まで引つ張る。ずるずると背もたれに寄り掛かる格好で引き寄せられ、抱き上げられるかと思いきや、抱えられたのは太ももだった。

足の付け根を両側から指で開かれる。こちらをうかがいながら粒に息をふうっと吹きかける顔は意地悪そうさ。

「や……」

直後、舌が割れ目に沿って滑るのを目の当たりにし、呼吸が止まるかと思った。

「イヤっ……！ や、んあっ、ダメ、相良さ、これ、舐めてるとこ、見え……っ」

いつもは角度的に隠れている舌が。視線が、はつきりわかる。

「見せてるんだよ」

「ど、どうして……ッひ、やあ」

「このほうが興奮するだろ？」

クチュ、とそこを広げながら相良さんはうつつすら笑う。そして笑顔のまま、唇をぐつと押し当てた。

彼はいつもこうして、大胆で淫らな喜びを、慣れない私の体に教え込む。

下唇を噛んで一旦は声を殺したものの、何度も連続して同じような刺激を与えられるは、堪えきれはるがなかった。

「や、っんアあ、あ、いや、はずかし、い」  
 「ちゃんと見ろ。おまえが普段、どこをどんなふうにされているのか」  
 目に映るのは、秘裂の上を前後にゆっくり動く舌。粒を掠められるたびにビクつと下腹部が跳ね、腰が浮いてしまう。相良さんの行為が、というより自分の反応が恥ずかしくてたまらない。

「あ、あ……っ」

見ると言われても見てなんていられないよ。目の前の光景を消すように、両腕を交差させて目元を覆った。

「せっかくいい顔をしているんだから隠さず見せろよ。夫婦だろ」

「っ……ふ、夫婦、つて、いつもそうやって、さも一般的、みたいに」

狡いと思う。

私は相良さん以外の男性が何をしてくれるのかなんて知らない。判断ができない。だから、結局受け入れるしかなくなってしまうのに。

「俺の基準ではこのくらい序の口なんだがな」

戒めるように粒を強めに吸われて、悶えながら自分の手の甲を噛んだ。

「ん、はん、んっ……」

「素直に啼け。啼いて、乱れて、俺を欲しがれよ」

顔の前に翳<sup>かざ</sup>していた手を退けられ、彼の左手でお腹の上で拘束<sup>こうそく</sup>される。すると胸の間には谷間<sup>やま</sup>ができ、膨らみが波を打って震えるのがいやらしかった。

それだけじゃない。ますます背中が丸まって、足の間を覗<sup>のぞ</sup>き込みやすくなる。咄<sup>とつ</sup>嗟<sup>さ</sup>に臉<sup>まはた</sup>を閉じたけれど、反応する体は止められない。

「ひあっ、あ、音、そんなに立てない、で」

柔らかな舌に入り口を割られ、蜜を吸い取られる感覚に、お腹の奥が締まる。じんわりと体に広がるのは、とろけるような痺れだ。

「静かに啜<sup>すす</sup>つたら余計にねちっこくなるぞ。それでもいいのか」

「ん、ん……」

「胸は寄せておけよ。すぐにそっちも舐める」

恥ずかしい。逃げたいくらい恥ずかしいのに、いますぐ突き込まれたいと——繋がれたいと思ってしまうのは何故なの。

（あ、ゆび、はいってきてる……っ）

ぬるぬると周囲に蜜を塗り広げつつ、様子を見るように挿し込まれる異物の感覚。

充分潤<sup>うる</sup>っているのにわずかな抵抗を感じ、思わず目を開けてすぐさま後悔した。

抜き挿しを繰り返す、彼の右手の中指と薬指。

親指は濡れた割れ目をかき分け、粒を露<sup>あ</sup>わにしようとしている。

「あつという間に大きくなったな、ココ」

「……っ！」

「ナカが好きか？ もう一本、挿れてやろうか」

いつもこんなふうに弄じられているんだらうか。私は毎回こんな反応をしていたんだらうか。

改めて見せ付けられて、心臓が止まりそうになる。

「も、やだ、相良さ、これ以上見せないでえ」

恥ぢずかしい。嫌がついているくせに感じさせられてとろとろに濡れてしまふ自分が恥ぢずかしい。

もがいて逃げ出そうとする私を、相良さんは当然許してくれない。腕を拘束する手に力を込められ、寄せた胸にむしゃぶりつかれて、それでも良くて、涙が滲じんだ。

指はゆっくり前後して、粒を転がしながら出たり入ったりを繰り返す。たまらなくなつて仰のけ反ると、足の間に舌でさらなる愛撫を与えられる羽目になった。

ソファが汚ぞれちゃう。そう思っても、とろけ出す液と吐息混じりの声は止められない。  
「あ、んんっ、ヤああ、待っ、んっ」

「そろそろ慣れるよ。おまえが結婚したのは、回数ばかりをこなしたい若造じゃねえ。じっくり、しつこく、妻を開發したいオジサンだ」

「ふあつ、あ、あ……！」

「俺が満足するまで可愛がらせるのも、妻としてのつとめだぞ」

内壁をくすぐるように動く指先と、芽を弾く舌先に悶もたえながら崩れ落ちていくのは理性だ。

「あふ、あ、んん、き、もちい……」  
気持ちいいよお。

快感のぶんだけ、恥ぢずかしさがどんどん遠くなっていく。

内壁を押し広げる指が愛しい。もつと、もつと奥まで探つて欲しい。ナカを圧迫感で満たして欲しい。

それからいつものように、全身を強く抱きしめて揺らして欲しい。訳がわからなくなるまで、何度も、繰り返し——

「さがらっ、さ……、もお、い……っ」

「……イってもいいぞ」

「ヤ、ちが、もう、きて……来て」

恐る恐る見つめた彼の額にはわずかな皺しわが寄っていた。苦悶くもんというより、耐えることを愉たのしんでいるかのような表情だ。

「このままイけと言っているだろ。指と舌じゃ不満か」

そんなことはない。指先は内側の感じるところを正確に捉えているし、粒の周囲はもはやどこを舐められてもイイ。良すぎて、息がうまくできないくらい。

「相良さん、が、いい……っお願い、はやく」  
弄られるだけじゃ足りないの。

きちんと奥まで繋がりたい。こんなに濡れているのは、相良さんを受け入れるためだもの。

ねだると、彼はわずかに考え込んだあと服をばさばさと脱ぎ捨てて私の前に膝立ちになった。

(やっともらえる)

繋げてもらえる。嬉しい。

割れ目の間を滑る重みのある熱に、身震いしながら神経を傾ける。知っているはずの感覚なのに、初めて知るみたいにドキドキする。

「ん……っ」

すると、それは予想に反してナカに突き込まれることなく、前のほうへと流れた。粒を軽く転がすように、ゆったりと割れ目を擦られる。

「や、はやく、いれて」

「ダメだ。ゴムがない。だが、二階に取りにいったら興ざめだろ」

だからこれでイけよ、と低くささやかれて青ざめてしまった。これで、って、本気で言ってるの？

「んっ……あの、パーティーはもうすぐだし、もう避妊はしなくても」  
「断る」

うそ。泣き出しそうになる私の両の腕の二の腕は、彼に掴まれて体の左右で拘束される。と、寄せられる格好になった両胸の間には先程と同様のふっくらとした山ができる。

そこに左右から親指を伸ばし、彼はそれぞれの膨らみの先端をとらえながら腰を動かした。

「やっ、あー」

くに、と胸の突起をふたつ同時に、視界に入る位置で押し込まれて身悶えてしまう。恥ずかしい。恥ずかしいのにひたすらいい。

彼のものが粒の上を優しく滑って刺激する。前に後ろに、まるで内側にあるかのような動きを繰り返し返して私を昂ぶらせる。

「香奈……おまえは今、自分の中に挿れたい、と思う男に弄られている。理解してるか」  
「んっ、ん……あふ、あ」

どうしてそんなに煽るようなことをいうの。

想像したら、空虚なままのナカがヒクンと締まった。ますます蜜が溢れ出し、一気に、

そのときが近づく。

「あ、ああっ、んやああ」

きちやう。いや、いや……！

彼が腰を揺らすたび、淫らな音があがって淫靡な気持ち掻き立てられる。そこに、止めることなく与えられる両胸への刺激が加わり、ショートしそうになる。だめ。

「イけ、香奈。俺が堪えていられるうちに……」

そうささやかれるのと、私の背中が反り返るのと、どちらが先だったかはわからない。

「やあ……ああああ……！」

一層高い声を上げたら、全身に毒っぽい甘い痺れがまわってきた。

いつもなら満足そうに私を見下ろすはずの視線は、いつになく歯がゆそうで、焦れているふうで——欲しがられていることが手に取るようにわかって、いけない喜びを覚えてしまったことは、内緒にしておく。

「……うむ……」

眠りから覚め、ぼんやりと黄色みがかったライトが照らす薄明るい部屋の中、感じたのはふかふかのお布団から香るお日さまの匂い。ここ、寝室だ。

「さがらさん……？」

どうして私、ベッドに。

状況が呑み込めないながらもとにかくその名を呼べば、窓際から「どうした」と低い答えが返ってきた。

「目が覚めたか」

本を片手に彼がゆったり腰掛けているのは、黒革とスチールパイプが特徴のバルセロナチエア。

ドイツの建築家が手掛けたというこの作品は、家を建てたときに常務がプレゼントしてくれた特別なインテリアだったりする。

「痛いところはないか。体調は？」

側までやってきて、覗き込みながら額に手を当ててくれる相良さんは、優しいけれどちょっと過保護だ。

「ううん、平気。時間は？ 今何時？」

「二十二時」

「えっ!? ゆ、夕飯」

支度してないよ！ 起こしてくれば良かったのに。

一体どれだけ深く眠っていたんだらう。相良さんに押し倒されたときまだ明かったことを思うと、軽く四、五時間は寝ていたことになる。



(どれだけ暢気なの、私)

明日から忙しいっていうのに、今夜眠れなくなっちゃったらどうするの。慌てて起き上がろうとすると、肩を掴んで制止させられた。

「ああ、いい。そんなに焦らなくても。夕飯ならさつき、出前で寿司をとっておいだ」「お、お寿司?」

「そう、寿司。俺の奢りだ。先に降りて準備しておくから、おまえはゆっくり来ればいい」  
ぽかんとしてしまふ。なんでまたお寿司。今日は特に何の記念日でもなかったはず。私が首を捻っていることに気付いたのか、相良さんはベッドサイドに腰を下ろして、私の頭をぐりぐりと撫でてくる。

「おまえの休日俺のために費やされてたんだな。改めてそれがわかった一日だった」「え、え?」

「俺は仕事さえなければ休んでいられるが、主婦はそうもいかない。知っていたようで、その点、目を逸らしていたような気がする」

見上げれば、ほんの少し萎れた笑顔があった。

私の頭をなおも力まかせに撫でながら、彼は言う。

「妻は偉大だな。おまえ達に比べたら、夫にできることなんてたかが知れてる」

「そんなことない!」

相良さんが稼いでくれるから私はご飯を食べられるし、この家にだって住めるのだ。

そう言おうとしたものの、頭を撫でる手が強すぎて発言がままならない。

堪りかねて強引な手から逃れようと身を引くと、右腕を掴んで引っぱられる。

「わ!」

すぐさま抱き寄せられて、広い胸に閉じ込められてしまった。

「感謝のしるしに頑張ってやろうと考えていたんだが……いつもこうだな。触れれば抱きたくなる。抱けば、どんなに優しくしようと思っても、気付いたときには無我夢中で貪っている。ごめんな」

肩をきゅつと抱かれ、自分が服を着ていないことによりやく気付いて、顔が熱くなった。  
「……だいじようぶ。気持ち、よかったよ」

夢中になつてくれるのも嬉しいし、嫌だと感じたこともない。そう言うと、額に柔らかないもの押し当てられる感触がして、低くささやきを落とされた。

「可愛いことを言ってくれるな。せっかく準備を整えたのに、フライングで先に言ってしまうそうになるだろ」

後半は、独り言のようでもあったのだけれど。

準備……パーティーのことだろうか。それとも個展? 今、準備と言ったらどちらかだよ。でも、フライングって何かな。

「どういう意味？」

「さあ」

嘯く彼の腕の中、私はやはり首を傾げて混乱するばかりだった。

昔からなんとなくミステリアスなところのある人だったけれど、結婚してもその点は変わっていないみたいだ。

そんなふうになんか考えていた私が、事の真相を知って仰天するまであと五日。

「ほら、服を着ろ。風邪を引くぞ」

「あ、うん。あの、昼間着てた服は？」

「洗濯機。もう夜だし、パジャマを着たらいい。なんだ、足元がおぼつかないな。自分で着られないなら俺が着せてやるが」

「遠慮しておきます。すんなり済みそうにないし」

「否定しない」

「……やっぱり」

ひとまず、篠竹家は今日も平和です。

## 2

翌、月曜は『come into view』——つまり相良さんが代表を務める芸術家集団の事務所にて個展の最終調整が行われる日だった。

調整とは主に、美術館への作品の搬入、そして展示についてだ。

個別にはこれまで何度も話し合いを重ねてきたけれど、関係者が一堂に会するのは初めてのこと。

搬入業者の代表の方々に、キュレーターさん達美術館の関係者、スポンサー企業の方、そして我々が代表である相良さんと、専務と常務

（じゅうぶ）

リビングスペースで会議用テーブルを囲むのは重鎮という言葉が似合いそうなミドルばかりで、女子社員に混じってお茶を配る私はどうにも緊張してしまう。

続く作業部屋にいる他の社員達も落ち着かない様子だ。いつもマイペースな藤くん（ふじ）さえ、お茶ばかり飲んでそわわっている。

するとお茶を配る私の前に、突如として長方形の厚紙が差し出された。見れば、それは名刺だった。

「はじめまして、奥様。伊勢原美術運輸の伊勢原と申します」

差し出しているのは一重瞼のミステリアスな男性だ。グレーのスーツを着ていて、どことなくキツネっぽいものの紳士という言葉がぴったり当てはまる。年の頃は相良さんと同じくらいだろう。

——わ、私に名刺？

差し出されただけで焦るのに、印字されている『代表取締役社長』という肩書きを見て狼狽えてしまった。運送会社の社長さんだ。

「あ、こ、こちらこそはじめまして。その、すみません私、名刺は持っていないのですが」「いえそんな、お気になさらずに」

促され、私はトレーを置くと、お茶を配っていた手をカットソーで拭つてから、おずおずとそれを受け取った。

伊勢原美術運輸さんは作品を梱包して美術館に運び入れ、設置までしてくれるという、その道では有名な美術専門の運送会社だ。

どうやら以前にも何度か相良さんの作品を運んでくれたことがあるらしく、専務達の信頼も厚い。私というと、初めてお会いするのだった。

なのに、どうして私が妻だとわかったのだろう。他にもお茶を配っている女子社員は数人いるのに……不思議。

疑問に思いつつもひとまずお礼を言おうとすると、伊勢原さんの隣の男性がおもむろに立ち上がってこちらに頭を下げた。

「これはこれは失礼致しました、篠竹さんの奥様でしたか。初めまして。私はキュレーターさかの坂井と申します」

それを合図にしたように、皆が一斉に席を立ち、名刺を差し出して来たから面食らわずにはいられなかった。

「私からもご挨拶を！」

「私も！」

「え」

なにやら大変なことに……！

「あ、あの、ありがとうございます。皆様どうぞよろしく願いますっ」

作法、間違えていないかな。名刺を受け取りながら心配で相良さんをちらと見たけれど、彼は私を見つめ返すばかりで助け舟を出してはくれない。

見兼ねたららしい常務が割って入ろうとするのも、さりげなく止めてしまった。

いつもなら庇ってくれるのに、この重大局面で放っておくなんてどうしてなの。

そんなことがあって、ぺこぺこお辞儀をしながらリビングスペースを出たときには命からがら、喉もカラカラで倒れ込みたい気分だった。

茶道具を片付けようと給湯室へ戻ると、女子社員三人が温かく迎えてくれる。「お疲れさまー。なんだか囲み取材を受けているみたいだったわね、香奈ちゃん」

私が手に持っていたトレーを受け取り、真っ先に労いの言葉をかけてくれたのは財前さん——財前詩文さん、三十八歳。噂の主婦友達だ。

長身の彼女は、すらっとしたパンツスーツに身を包み、本日もデキる女風。

毛先だけカールさせたロングヘアは今日の打ち合わせに備えてか、珍しくうしろでひとつにまとめてある。それがまた、色っぽくて懂れてしまう。

ぱっと見、私より財前さんのほうがずっと代表者の妻っぽいんだよね。羨ましい。

「ありがとうございます。テンパってしまいました……」

私がそう言いながらため息を落とすと、Web担当の佐々木蝶子さんが肩をぽんと叩いてくれた。

「いっぺんに囲まれたら無理もないわよ。心の準備ができてなかったでしょ。あたしも、まさかあんなふうになるとは思わなかったから傍で焦ったわ。間に割って入るうにも篠竹さんに止められるし」

ですよ、とそれに同意したのはグラフィック担当の永倉法ちゃん。

「そもそも名刺交換って緊張しますよね。私、未だに手が震えますもん」

蝶子さんは四つ年上、ノリちゃんは同い年で、同じく恋する乙女として仲良くしてもらっている女子社員だ。私は仲の良い三人を前に、心底ほっとする。

「手どころか私、膝までガクガクです。名刺交換ってあんなふうなんですわね」  
情けないことに、二十六年生きてきて初めての経験だった。

自分の名刺なんて持ったことがないし、前職もアルバイトだったから正式な場には縁がなかった。

ぬるま湯の中で生きてたんだな、私。そりゃ、学生っぽさが抜けないと言われても当然だよ。

「はい、お茶でも飲んで、少し落ち着いて。香奈さん、顔が真っ青」

「わーん、蝶子さん優しい。ありがとうございます」

「どういたしまして。しかしボスったら自ら助け舟を出すかと思いきや知らん顔だなんて、冷たいのね。案外と放任主義？」

蝶子さんはゆるい巻き髪を揺らして腕組みをする。その隣で、うんうんと頷くノリちゃんは飾りつけないショートボブだ。

「周囲に手を出させないならせめて、お手柔らかに、とかやんわり言って欲しい場面でしたわね」

「ね、普段はめろめろに甘いのに、どうしちゃったのかしら。おしどり夫婦だってこと、

取引先には悟られたくないとか?」

「うーん、でも、伊勢原美術運輸の社長は香奈ちゃんのことを知ってるみたいでしたよ。おふたりの関係にも詳しいんじゃない」

「ああ、伊勢原さんはボスの昔なじみらしいから、そりゃ知ってるでしょうよ。斎藤から聞いたわ」

そうだったのか。妻なのに夫の人間関係を把握できていなかったなんて……反省。

「とうかボス、伊勢原さんにはせめて事前になにか言っておいてくれても良かったのね。名刺交換は後にしてやってくれ、とか」

う、ううん、確かにそうなんだけど。

助けてくれたら嬉しかったけれど、でも、問題は相良さんというより不慣れな私にあるわけで、だからあの行動には裏がある気もするんだ。

私は無言のままの財前さんをちらと見る。同じことを思っているのか、目が合ってほんのすこし微笑まれる。

やっぱりそう、なんだろうな。

「……あれ、わざとだったんじゃないかなって思います」

そう言った私の脳裏には先程の出来事が蘇よみがえっていた。

「相良さんが助けに入ろうとした皆を引き止めていたのは、私のためだったんじゃない

かなって」

「香奈さんのため?」

「はい。私が場慣れするように」

そう、相良さんはちゃんと私のことを見ていた。それでも助けようとはしなかった。状況を察していなかったわけじゃない。察していたからこそ、手を出さなかったんだ。

「パーティーの日はきつと、もつと沢山の方に、あんなふうに話しかけられることになると思うから、だから」

覚悟を決めると教えてくれたんだ。どんな状況下でも堂々としていられるように。

だとしたら私はまだ護まもられている。優しい腕の中で、護られたまま。

——こんなのが駄目だ。

お茶をぐつと飲み干して、同時に椅子からお尻を剥はがした。膝はまだ臆病な私を笑っているけれど、立たなきゃと思った。

自分の力で。

「……私、頑張ります。このくらいのことでは動揺するなんて情けないです」

「香奈ちゃん」

「お茶のおかわりは私がひとりです。だから皆さんはお仕事に戻ってください」

本番はもう、すぐそこに迫ってる。

話し合いでは、プロジェクトーを用いたシミュレーションや、実際に展示物を並べての検討も行われていた。そこで一部、急遽壁面の色の変更なども決まったようだった。たくさんの提案にひとつずつ結論を出していく相良さんは、やはり誰より素敵で……私はお茶をかえに行くたび、真剣な彼の横顔に胸を高鳴らせ、あとの時間は休憩室の隅でパーティーの出席者名簿を捲っていた。

四日後、個展開催に合わせて行われるパーティーで、私は彼から特別な役割を与えられている。

五百名弱の出席者の顔と名前を暗記し、それぞれに的確な感謝の言葉を述べるのだ。

それは、人の顔を覚えるという妙な特技がある私に彼がくれた特別な『仕事』。

これまで、どうしてここまで徹底して覚えなきゃならないのかな、と疑問に思ったりもしたけれど……ようやくその意味が見えてきた気がする。

あんなふうにくまれたら、誰に何を言われたのか、何を言ったのかなんて咄嗟にはわかりっこない。

失礼にあたる言葉を口走ってしまいかもしれない。

逆にあの場面で全員の名前と顔がわかれば、どれだけスマートに挨拶ができることか。

そしてそれは私というより、相良さんの評判に繋がるんだ。

「——あ、奥様」

話し合いが十八時に終わり、茶器を片付けて休憩室へ戻ってくると、すぐうしろから出し抜けに呼びかけられて飛び上がった。

「わ」

「ああ、すみません。驚かせてしまっって」

振り返れば、申し訳なさそうに笑っていたのは伊勢原さんだった。先程名刺を下さった、キツネっぽい雰囲気伊勢原美術運輸、代表取締役社長だ。

お帰りになったかと思っていたけれど、残っていらしたんだ。

「お仕事中でしたか」

「いえっ、大丈夫です！」

開きかけていた名簿を閉じて立ち上がり、お辞儀をする。

「本日はご足労いただきありがとうございます。搬入当日はどうぞよろしくお願ひします」

「いえいえ。こちらこそ、毎回ご最前ひんまへにしています。そんなにかしこまらなくてもいいよ。僕と相良くん、べつに浅い仲ってわけじゃないから」

先程よりフランクな口調に、若干拍子抜けしてしまった。さ、『相良くん』……？

いや、そういえばさつき蝶子さんが言っていたっけ。伊勢原さんと相良さんは昔なじみだとかって。

「うん、画像より実物のほうが可愛い。二十六歳だっけ、若いねえ」  
「え」

画像？ 年齢までどうして。私、何も言っていないはずだけど。

「一生独身を宣言してた相良くんを愛妻家にしちゃうなんて一体どんな奥さんだろうと思っただけど、なるほどねえ」

「一生独身、ですか？ あの……、伊勢原さんってもしかして、主人の学生時代のお友達とか、なんでしょうか」

「うん。あれ、相良くんから聞いてなかった？ 美大の同級生でさ、当時僕は彼を合コンに誘っては断られてただけ」

返されたのは予想以上に気軽な声だった。大学時代の友人、か。

思えば、お父さんも口癖みたいに言っていた。相良は付き合いが悪かった、って。そういう意味だったんだ。

でもほんの半年前まで、彼が週の大半を飲み会と言って自宅になかなか戻ってこなかったことを思うと、どうにも信じられない。

大好きだろうと思ってたよ、ああいうの。

「なにしろ女嫌いだっただからね、相良くん」

「は……」

はい？

あんなに女の子の扱いに慣れている相良さんが、女嫌いだなんて冗談だよな。

「対する君の父親、安藤くんはそりやもうノリが良かったよ。大学が別なのにわざわざウチのキャンパスまで来て女の子を漁ったりしてて。どの子とも続かなかったけど」

「父ともお知り合いなんですか!」

「もちろん。一緒に合コンもナンパもした、懐かしい友人だね。当初は君のお母さんと後輩を加えた五人がいつものメンバーでねえ。遊びに誘うたびに相良くんにはいつも鬱陶しがられたもんだよ」

想像できる気がする。

相良さんに伊勢原さんに父に母に……あれ、これでは四人だ。しかし五人目の名前は聞いてもわからないだろう、と私は思っていた。

しかし父にしても母にしてもこの伊勢原さんにしても、相良さんの友人はみんな一癖ある人達だ。

鬱陶しがっていたという割に、慕われていると思う。きっと相良さんは面倒見がいいのだ。親友の娘である私の面倒も見てくれたし、懐かれると放っておけない性格なのかも。

そんなことを考えていた私は——  
 肝心の、彼が何故ここに残って私と話をしているのかについては考えが及ばなかった。  
 「ところでそれ、何です？」

と、伊勢原さんは私の肩越しにテーブルを覗き込む。その視線の先には、例のフェイ  
 ルがあった。先程まで私が捲っていた、パーティーの出席者の情報を集めた分厚いやつだ。  
 「あ、これは企業秘密です」

言わないほうがいいだろうな、暗記の件。

なにせ伊勢原さん達は今日、相良さんから直接招待状を受け取っていたし、だから出  
 席者のなかに含まれることになるはずだし。

種明かしはしないほうが、驚いてもらえるに違いない。

「へえ。ファイリングの仕方がずいぶん几帳面なんだね、奥さん。もしかしてA型？」

「？ はい、そうですけど。でもこれをまとめたのは事務の人間ですし、私はあまり几  
 帳面ではないですよ」

むしろ大雑把なほうだ。料理なんて常に目分量だから毎回微妙に味が違うもの。

しかし、突然血液型の話になるなんて。私は密かに苦笑する。

伊勢原さん、宗治さんに似てるなあ。地に足がついていない雰囲気というか、ちょっ  
 とズレているというか。

ちなみに宗治さん——宗治君弥さんというのは相良さんの高校時代のふたつ後輩に  
 あたる男性で、現在はレストラン等の店舗をいくつも経営する、やり手の経営者だ。

類は友を呼ぶ？ などと考えつつ、

「お帰りはお車ですか？ タクシーならお呼びしますけど」

と、さりげなく会話を切り上げようとすると、彼は難しそうな顔をして、厄介だなあ、  
 と小さく呟いた。

「厄介？」

タクシーが？

「あ、いや、独り言。帰りは秘書が迎えに来るから心配しなくていいよ。ありがとう」  
 首を傾げる私を残し、伊勢原さんは若干不自然な笑みを浮かべて廊下へ出て行った。

その背にはなぜだか、ぎこちない空気が漂っているように見える。

しかし私に尋ね直す時間的余裕はなく、なんとなく違和感を覚えつつも彼を出口で見  
 送るしかなかったのだった。

「じゃあ香奈ちゃん、また明日ね。追加のフライヤーと持ち込みの備品は圭一郎くんに  
 頼んでおいたから、篠竹さんにも伝えて。搬入口で会いましょう」

「はい。ありがとうございます。すみせんがお先に失礼します」



財前さんに見送られて事務所を後にしたのは空に夕焼けの残る午後七時。平常より二時間以上も遅い時間ながら、誰より早い退社だった。皆、まだまだこの後も残業だ。薄闇の中、半袖に馴染みつつある二の腕に、絡みつく夜風は生ぬるい。事務所にいると忘れそうになるけれど、七月に入ってから日暮れを過ぎて蒸し暑くて、うんざりするくらいに夏らしさが続いている。

(大丈夫かな……)

社員の皆、この暑さと慌ただしきで、倒れてしまわなければいいけれど。

なにしろ皆は展示会のサポートに加えて通常業務もこなさなければならぬ。誰も弱音は吐かないものの、疲れているのは明らかだ。

搬入日には相良さんをお願いして、お手伝いしてくれる方にも、事務所に残る方にも、何か差し入れをさせてもらおう。

できればスタミナがつくものを。

思いついたところで駐車場から相良さんの車がやってきたので、駆け寄って助手席に乗り込んだ。

「忘れ物はないか？ 日用雑貨くらいならホテルの売店でも買えると思うが、使い慣れたものは持つて行ったほうが無難だぞ」

シートベルトを締める私を横目で見ながら、彼は不安げに言う。

そう、今日から数日間、私達はホテル住まいの予定なのだ。

自宅から、個展が開催される美術館へは車で一時間強かかる。都会ゆえ渋滞に巻き込まれたら終わりだし、毎日通うのも大変だということで、徒歩圏内かつパーティー会場のあるホテルに泊まり込もうと決めたのだった。

「大丈夫だよ。一応、個人的に必要そうなものは全部持ってきたし、仕事で必要になるものの残りは圭一郎さんに託したって財前さんが言ってたし」

本当に心配性だなあ、相良さんは。そう言われるんじゃないかと思って、朝からもう三回も確認したから間違いないよ。そうバッグの中身を示しながら訴えても、彼はどうにも疑いを捨てきれない顔をしている。

「よりによって残りを託したのは藤堂圭一郎とは……いまいち信頼性に欠けるんだよな」  
藤堂圭一郎さんというのはノリちゃんの恋人、もと婚約者でもある男性の名前。ふたりは社内恋愛中なのだ。

建築デザイナーである彼は、私の四つ年上の三十歳で、蝶子さんとは同い年だ。気遣いが上手く場の雰囲気をやかにしてくれるので、事務所ではムードメーカーといった感じの人物。

「圭一郎さん、誠実でマメでいい人だよ。ノリちゃんも幸せそうだし」

「その誠実さとマメさが仕事にも生かせるといいんだがな」

「う、うーん。手厳しいね、相良さん」  
 こうして途中、夕食をとって向かったホテルでは、予期せぬハプニングが待ち構えていた。

「ダ、ダブルブッキング……?」

テレビでは何度か聞いたことのある言葉だけれど、実際に耳にしたのは初めてだった。つまり同じ部屋に予約をふたつ入れてしまった、ということだろう。ホテルのロビーの片隅で、まばたきをしつつ私はソファから腰を浮かせる。

「ああ。明日からは手配できているが、今日のみ部屋が足りない。予約窓口の不手際だそう。他のホテルを紹介されたんだが、肝心の美術館まで距離があるから断った」  
 相良さんは私の傍らかたわらの荷物を持ち上げ不機嫌そうに言う。

やけにチェックインに時間が掛かるなど思っていたけれど、そういう事情だったのか。ちらとカウンターに視線を投げれば、申し訳なさそうな顔でお辞儀を寄越される。その胸元に『支配人』と書かれていることから、ホテル側の誠実さはうかがえる。

「行くぞ、香奈」

「え、い、行くって」

「他のホテル。もう少し美術館に近い場所で探そう」

探す? これから? もう二十一時近いのに。

壁の時計を見上げておろおろする私の二の腕を掴み、相良さんは行くぞともう一度急かす。腕を引かれては、その場から立ち去るしかなかった。

車に戻ると、相良さんはタブレットで近辺の宿泊施設を検索し始めた。私も一緒になって手当たり次第問い合わせの電話をしたのだけれど、一向に空き部屋は見つからなかった。

近くでコンサートだかライブだかの大きなイベントがふたつ同日に開催されるらしく、そのために宿泊者が殺到したようなのだ。

「どうする? 自宅に戻る……?」

こうなったらもう、そうするしかないように思う。

でも、帰宅する頃には真夜中だ。明日も早朝の出発……と考えるとぐったりしてしまう。相良さんも疲れているだろうし、そのうえ運転なんて——心配になってチラと見ると、彼はシフトレバーを操作しつつ、諦めたように言った。

「香奈、どこでもいいか? 宿泊施設」

「うん、特にこだわりはないけど。和室でも洋室でも、なんならハンモックとかでも」  
 「ハンモック……いや、そこまで冒険的ではないんだが」

ホテルの駐車場から出た車は、元来た国道ではなく、細い路地へと進んでいく。

もしかしてカプセルホテルだろうか。でもあれは狭そうだし、体の大きな相良さんは休まらないんじゃないかな。なんて考えていると、

「ああいうところ。抵抗がなければ入るが」

彼が指をさしたのは、入り口が巧妙に隠された形のファッショナブルな建物。看板には、何種類か料金が書かれていて――

「えっ!？」

どんな施設なのかは、疎い私でもはつきりとわかった。オトナのカプセルがいちゃいちゃするために入るところだ。

「む、む、無理っ……」

興味が無いわけではないけれど、心の準備ができていない。ぶんぶんとかぶりを振って縮み上がる私を見て、相良さんは呆れたように笑う。

「そんなに焦るなよ。夫婦たる」

相良さんは卑怯だ。ここぞと言うときは必ず『夫婦』を引き合いに出して私を黙らせる。結局、あわあわしている間に車はコインパーキングに止まり、私は手を引かれてその建物へと連れ込まれた。

誰かと行き会ったらどうしよう。どきまぎしているうちに、部屋へと辿り着いてしまう。は、入っちゃったよ、ラブホテル。

「……ん？」

しかし、恐る恐る覗いた室内は予想と違い、ごく一般的なホテルそのものだった。

ダブルベッドに液晶テレビにデスク……以前宿泊したジュニアスイートと同等の広さはあるし、なんだ、身構える必要はなかったな。

というより、値段からしたらこの施設はずいぶんと良心的な気がする。

ホッと力を抜いた私の頭を、相良さんはぐりぐりと撫でて「な、大したことはないだろ」と笑う。

その通りなのだけれど、だからこそ、ちよっぴり癢に障った。

「……相良さん、やっぱり女嫌いだったなんて嘘でしょ」

「あ？」

取っ替え引っ替えだったでしょ。じゃなきゃこういうの、知らないはずだもの。

過去のことだし、私に文句を言う権利はないとわかってはいる。けれど黙ってはいられなかった。

「今日、伊勢原さんが言ってた。相良さん、学生時代は女嫌いだったって。でも、その割に色々と詳すぎるよね」

となると、伊勢原さんのあれはフォロワーだったとも受け取れる。ものすごくモテた過去を隠すための。

そんなに遊び人ではなかったよ、大丈夫だよ、(本当は相当モテたけど)との、カッコの身が見えるようだもの。

「なんだ、いきなり突っかかってくるなよ。カルシウム不足か？」

「ちがう。なるべく気にしないようにしてるのに、暗に肯定された感じがして嫌なだけ。今さら私が何を言ったって過去が変わるわけじゃないってわかってるけど、でも」

でも、以前は気にならなかったはずなのに、関係が深くなればなるほど引っ掛かる。

今はもう私の旦那さまだとわかっているのに、現在だけじゃなくて、未来も過去も独占したくなる。

「私、もっと早く生まれたかった」

どんな女の子よりも一番先に相良さんに逢いたかった。相良さんの初めての相手になりたかった。なんて、言われても困るよね。

早くに出会っていたからと言って、好いてもらえるとは限らないし。

そもそも私が相良さんとお近付きになれたのは、親友の娘だからだし。

「……ごめん、お風呂入ってくる」

「おい、香奈」

呼び止められはしたけれど、私は荷物を抱えたまま部屋の奥へと向かった。側にいたら余計なことをもつと言ってしまうようで怖かった。

多分このドアがバスルームだ。

そうして私はドアノブに右手をかけたものの、ドアは動かなかった。引けども、押せども、開かなかった。

何故なら、追いかけてきた彼が手を突いてそれを阻んでいたので。

「阿呆、言うだけ言って逃げるな」

つむじにふうつと吹きかけられるため息。

「あ……」

「可愛すぎるからあまり妬くなと言っておいたのに、まったく」

脳天に降ってきた低い声に、頭の奥がじんと痺れた。

「確かに俺は女嫌いだったよ。チャラチャラ着飾って男の気を引こうとする女ほど嫌いだった」

相良さんは観念したかのようには語り始める。

「……うそ」

「嘘じゃねえよ。本気で迫られるのも好きだと言われるのもごめんだっただ。だが」  
振り向かされて、オデコにちゅ、と優しいキスをひとつもらったら、逃げようとしていた自分が情けなくなってきた。やだな、泣きそう。

「不思議だよな。俺は——最初から、おまえの告白にだけは嫌悪感を覚えなかった」

「うそだよ」

「嘘じゃねえ、つて何べん言わせるんだよ。まあ、嫌悪感を覚えなかったのは、何十回告白されても本気と受け取らなかったからかもしれないが」

ヒドイ。けれど、それが本心なのだろうと思う。

「……私、信じてもらえないかもしれないけど、幼稚園児の頃からずっと相良さんのこと、本気だったよ」

大好きだったよ。一生の人だと思ってたよ。

「わかつてる。今は信じてるよ。だから最後まで聞け」

脱衣所のドアに背をもたれる格好で、左右を彼の腕に、そして正面を彼自身に閉じ込められる。毎日一緒にいる人なのに、心臓が暴れてしまうのは何故だろう。

「つまりだな、俺はおまえの本気を確信しないまま、おまえに惚れたんだ。この意味がわかるか」

わからない。首を振ると、こめかみに唇を押し当てられた。

そうしてそこに落とされたのは、低くて甘いささやきで。

「おまえは世界でたったひとり、俺に片想いを経験させた女なんだよ」

「かた……おmoi」

「ああ」

相良さんが、私に？

信じられなくて、思わず彼を見つめた。

目の前にあるのはきれいに年を重ねた、日本人にはめずらしく彫りの深い、はつきりとした顔立ち。

憧れ続けた人——届かないと思っていた人の顔。

「自覚したのはおまえの高校卒業の頃だから、かれこれ八年近くか」

「そんなに長く……」

「何度カマをかけてもうまくかわしやがって、俺をこんなに振り回したのもおまえが初めてだぞ」

信じられない。

カマまでかけられていたなんて、まったく覚えがない。私はてっきり、自分だけが彼に片想いをしているものとはばかり。

呆然とする私の頬に口づけたあと、彼はその唇を首筋に這わせ、カーデイガンの裾から手を滑り込ませてくる。

「俺にはおまえだけなんだよ。自覚しろよ」

当たり前のようにワンピースの背中ファスナーを下ろされ、思わず身をよじる。

「さ、相良さん、明日の朝、早いよ？」

「だから？」

「ここ、朝食つきじやないから外で食べなきゃだし、だから、今日は」  
 早めに休んだほうが。言った唇を塞がれて、カーディガンとワンピースを同時に床の上に落とされて――

「ようやく振り向かせたんだ。タガくらい好きなときに外させろよ」  
 もう一度低くささやかれたら、抵抗する力なんて失せてしまった。

振り向かせたなんてとんでもない。私のほうこそずっと好きだった。結婚してからも、結婚する前も、ずうっと。

「香奈……」

腰を左右から掴んだ手が、脇腹を撫でながら胸までやってくる。カップ越しに何度か揉み込まれたあとホックを外され、露わになった膨らみは表面をそっとくすぐるように触れられた。

右胸の先を大きく頬張り、その中で舌先を先端に絡めては、チュ、っと音を立てて離される唇。何度か反応を見るように繰り返し、今度は左胸へ移動する。

ゆっくり突起を口に含まれ、舌で同じような刺激を与えられるかと思いきや、数度に渡って細かく吸われ、私は震えながらため息のような声を漏らした。

「……あ、っ……ふ」

相良さんの愛撫はいつも優しい。優しく、丁寧に、私を味わい尽くすみたい。

——このまま食べられてしまいたい……

うっとりとした彼の頭を抱えて撫でると、彼は私の左胸の先を咥えたままネクタイを引き抜き、シャツをその場に脱ぎ捨てた。皺になるのも気にせず。

「ベッドと風呂、どっちにしようか？」

「ん、お風呂、はいりたい……」

今日も暑かったから先に汗を流したい。

そう言うと、左手でショーツ越しにお尻をぐっと握り込まれた。その手はそこを数度揉んだあと下っていき、うしろから足の間の最も柔らかい部分を捉える。

「はいりたい？ 風呂で俺に弄り倒されたい、だろ」

割れ目の左右の膨らみを、ふにふにと交互に揉み込まれると、内側がとろりと滑って、粒を転がすのがわかった。

「あ、あ」

「準備はできているみたいだな」

こんなに簡単に濡らされてしまう自分が恥ずかしい。けれど、止められない。  
 相良さんは私の唇を奪い、キスをしながら脱衣所のドアを開ける。

最後の一枚であるシヨーツを脱がされながら後退する格好でバスルームまで辿り着くと、そこにあつたのは我が家の三倍はあろうかという洗い場だった。広い、広すぎる。見れば何故だかプールサイドで見るとような分厚いマットがどんと壁際に立て掛けられていて、私は首をひねる。何に使うのだろう。すると相良さんは迷わずそれをタイルの上に敷き、シャワーをかけて温めながら私を呼んだ。

「おいで、香奈」  
「え」

乗るの？ 目をぼちくりしていると、抱き寄せられて、その上に膝立ちにさせられた。「洗ってやるからじっとしてろよ」

言って、背中、お尻、太ももまでボディソープを塗り広げる掌。丹念に、隅々まで触れられて、くすぐったさに肩が跳ねる。

しかし洗うにしてはやけにボディソープの量が多い。ボデイスポンジを使えば半分以下で済みそうだ。それでも黙って言われた通りにじっとしていると、唐突に彼の右腕が太ももの間へと差し込まれて、高い声が漏れた。

「ひゃんっ」  
「後ずさるな。そのままだ、いいな」

思わず息を呑んだのは、彼の右腕がぐっと足の付け根にあてがわれたからだ。それを

手前にぬるりと引き抜かれ、私はビクッと体を硬くする。

「あ、あ、やあ……っ」

だめ、これ、粒が当たって滑る……

震えながら彼の首にしがみつくと、今度は逆に肘までぬるりと押し込まれた。

「んあっ、さ、相良さ、もうそこは、いい……っ」

「うん？ まだきちんと洗えてないよな？」

そう答えた口角が意地悪そうに上がっているのを見て、私はやっと真意を悟る。わざとだ。最初から洗うつもりなんてなくて、このためにボディソープも多めにつけたんだ。

「きちんと綺麗にしような」

「や……！」

ふるふるとかぶりを振る私の腰を抱え、彼は容赦なく右腕を前後させる。強く当てて奥へ、軽く当てて手前へ。

押し込む際と引き抜く際とは、粒に当たる角度が違う。どちらも良くて、勝手に腰が揺れてしまう。

「やあっ、あ、ふ……これ、いや、ヘンになっちゃ……」

やっぱり詳しくすぎだよ、相良さん。女の子がどうしたら気持ちよくなるのか、どうしてこんなによく知ってるの。